旧世界の遺産

—— Anzia YezierskaのBread Giversの論 ——

北　川　典　子

*Bread Givers : A Struggle between a Father of the Old World and a Daughter of the New*はサブタイトルが示すように，ポーランドのシュテトルからアメリカへ移住したSmolinsky一家の末娘Saraが，いかにして旧世界ユダヤの因習に凝り固まった父の専制と戦い，新世界アメリカで自らの地歩を築いていくかを描く物語である。移民がひしめく今世紀初頭のニューヨークを背景に，ユダヤ人ゲットーでの極貧生活，男尊女卑の精神を執拗に強要する父，ユダヤ社会，そして宗教，その父の下で悲惨な生活を強いられる無力な母と姉たち，こうしたものの全てに激しく反発したサラは，若くして家を飛び出し，自由と平等の国アメリカへ乗り出す。彼女の理想とする独立独行の"person"として生きるためである。小さな身に余る重労働，慣れない英語を用いての勉学，貧しい移民への偏見などを乗り越え，晴れて大学を卒業したサラは，出版社主催の懸賞論文で栄光の一位に輝き，念願の教師の職を得，勤務先の若き校長と結ばれる。サラの半生を辿れば，貧しいユダヤ移民の娘が様々な辛苦と孤独に耐えながらもアメリカン・ドリームを達成する一種のサクセス・ストーリーが浮かび上がる。

しかし彼女の心中深くには，アメリカ社会に入り込みアメリカ人として成功しようとする激しい渇望とは寧ろ逆行する動きが渦まいている。意識の上では反発し憎悪しているはずのユダヤ的なものを，事あるごとに思い出し，それらを尺度としてアメリカを測り，やがて教師となって回帰してゆくのは故郷のユダヤ人ゲットーなのである。そこで本稿では，彼女の中のユダヤ性という側面に光をあて，彼女が旧世界の両親を通じて継承したユダヤ性の実質を明らかにすると共に，このユダヤ性がアメリカで独立してゆく娘ににどのような影響を与えるか，又反逆と自立の後に辿るユダヤ性への回帰がどのような問題を孕んでいるかについて考察したい。

I

サラが堪えに堪えてきた感情を爆発させ，父との激しい舌戦の末家を飛び出したのは，十

七才の時だった。当時の彼女の胸中は興奮の坩堝と化しており，父への憎しみとユダヤ的なもの全てに対する怒りが渾然一体となって煮え滾っているのであるが，旧世界からの遺産を明らかにするために，先ずサラがユダヤ性の中の何を断固拒否しているのかを明確にしておきたい。

サラがもっとも嫌悪したのは，母や娘たちにあらゆる犠牲を強要する父，彼女の言葉を借りれば，"a tyrant more terrible than the Tsar from Russia"[1]たる父である。娘を搾取工場で働かせ，妻に血の滲むような生活苦を強いても，タルムード学者たる彼は朝から晩まで研究と称して，一切働かない。そして飢えに震え疲れ切った女たちをさしおいて料理の最高の部分を独占し，狭いアパートにひしめく女たちを尻目に最上の部屋を一人占めする。腐敗と汚濁の中で唯一人尊い神の教えを伝える彼ならば，当然のことだというのである。その上彼は，娘たちが漸く見つけてきた恋人たちを，神への恐れを知らぬ不敬者，或は父への孝を忘れた不忠者として退け，自暴自棄となった娘たちの心の間隙に乗じて，金持ち風の男たちに次々と嫁がせて行く。彼の考えによれば，娘たるもの，神に身を捧げた父を経済的にも支援し続けることは当然の義務となる訳である。神や義をもっともらしく振りかざす父，悲嘆に暮れながらも黙々と従う母と姉たち。当時のユダヤ社会では，娘が父に，女が男に仕えることが"the universal, immutable law of life"[2]とされていた。そうした中でサラだけが，犯罪者のような後ろめたさを感じつつも，父への疑問と憎悪を募らせて行く。

> I began to feel I was different from my sisters. They couldn't stand Father's preaching any more than I, but they could suffer to listen to him, like dutiful children who honor and obey and respect their father, whether they like him or not. If they ever had times when they hated Father, they were too frightened of themselves to confess their hate.
>
> I too was frightened the first time I felt I hated my Father. I felt like a criminal. But could I help it what was inside of me? I had to feel what I felt even if it killed me. (65)

こうして彼女は幼いながらも，父が女たちからその稼ぎを吸血鬼のように吸い上げ，そのためには彼女たちの希望も将来も粉砕して顧みないことを看破し，彼の不正と非道に対する反逆を心に誓う。

父のこうした言動を支えているは，トーラの根底に潜む男尊女卑の思想である。ユダヤ社会においては，長い間，男だけが学問，宗教の世界を独占し，女はその世界への参入を禁止されてきた。それゆえ，サラの父も種々のユダヤ文学の中で描かれる男たちのように，トーラや神についての素晴らしい物語を披露して「無知な」女たちを魅了してやまない[3]。例えば，

ある敬虔なラビの妻が，嫌がる夫を説得し，神から金塊を贈られる。夢に現れた天国の宴で，豊かな食事を享受するはずのテーブルの足が一本欠落していることに気付いた妻は，それが現世で入手した金塊であることを告げられ，自らの愚かさを悟ることになるのである。或は女も天国に許されることもあるが，それは夫や父に良く仕えた場合のみ，しかも天国でも男の僕となるためという話。そして行き着く先は，「女は愚か過ぎて学問には向かない」という繰り言。ここに見られるのは，素晴らしい世界を散々吹聴した挙げ句に，その世界から女をピシャリと締め出すユダヤ男の常套手段である。知的霊的渇望が人一倍強いサラがそうした世界から締め出され，いかに深く傷ついたかは想像に難くない。彼女は神の義を説く父の背後に女への非道を働く父を看破したように，トーラの物語の奥に潜む徹底的な女性排除，女性蔑視を看破し，激しく反発するのだった。

サラが嫌悪したのは，父やトーラだけではない。"how can I [Sara] do it [making herself a person] if I live in this hell house of Father's preaching and Mother's complaining ?" "And no fathers, and no mothers..." (66)とあるように，父に屈従し，辛苦と悲嘆に明け暮れる母に対しても，娘だけに一層強く反発する。サラの母のような移民世代の労多き母に対する視線は，同じユダヤ系でも男性作家と女性作家では大きく異なる。自らの運命に直接関わることのない息子たちは，子供や夫のために自らを犠牲にする母を讃美し理想化して描けば事足りることが多かったが[4]，いつか母の運命を辿ることになるのではないかという予感に慄く娘たちは，対照的に，そうした母の苦しみを全身で受け止め，彼女の苦しみを醜悪なものとして容赦なく抉り出す。例えばイージアスカは，サラの父が一家を支えるべく入手した店が皆の期待を尽く裏切るものと判明した時の母の姿を，生活苦に押し潰されなす術も無く取り乱す哀れな老婆のように描出する。又三児の母となった姉のMashahは，夫の浪費癖のために困窮しガスさえ止められてしまうのであるが，その時の彼女を描くイージアスカの筆致はその最たるものである。結婚前には道行く人々が振り返る程美しく溌剌としていたマーシャが，ヒステリックに子供を呪う醜い母へと急変する。

> The room darkened. The gas jet began to flicker and go out.
> "Oh, my God !" Frightened worry came back into Mashah's face. "The gas is going out. It's a quarter meter. What shall I do? Where shall I borrow now?" Mashah thrust the children on the floor. "Such a miserable existence! I wish they were never born. Can I never run away from this money — money — money !" (148)

サラは結局ユダヤの宗教や社会の男尊女卑，それに基づいてなされた父の女たちへの数々の

仕打ち，更に又母や姉の体現する屈従と極貧の生活などを全てユダヤ的なものとみなして断固拒否し，新世界アメリカへ羽ばたこうとする。

II

そんなサラにも，ゲットーの真只中，移民でごった返すヘスター通りの喧燥に包まれて，至福の時を味わったことがあった。事の経緯は次のようである。家賃は勿論食料さえ底をつくという家庭の窮状に矢も楯もたまらなくなったサラは，一家の最後の25セント玉を掴んでニシン売りのMuhmenkehの所へとんでゆく。幼いながらもサラは，遣り繰り上手の彼女が貧しさにもめげず逞しく生き抜いてきたこと，困っている人には手を差し伸べずにはいられないことを，直感的に知っていた。案の定，親身になって相談にのってくれたムーメンカは形の崩れたニシンを格安で分けてくれ，サラはヘスター通りで生まれて初めての商売を試みる。道行く人々の詮索や揶揄を耳に入れる暇もなく，ダイナマイトのような勢いで掛け声をかけてニシンを売り切ったサラの眼前に，これ迄忌み嫌い目を留めることもなかった移民の群れが，新たな様相を帯びて立ち現れる。がさつな行商人たちの物売りの声，少しでも安いものを求めて押し合いへし合いする女たちや，薄汚い子供たちの叫び声，これらが今や渾然と解け合い，生の躍動感に満ちた一種独特の“the music of the whole Hester Street”，“a new beautiful song”となってサラの心中に溢れ出す。

> It began singing in my heart, the music of the whole Hester Street. The pushcart peddlers yelling their goods, the noisy playing of children in the gutter, the women pushing and shoving each other with their market baskets — all that was only hollering noise before melted over me like a new beautiful song.
>
> It began dancing before my eyes, the twenty-five herring that earned me my twenty-five cents. It lifted me in the air, my happiness. (22)

サラのこの幸福感は，幼く貧しい女であるがゆえに何をすることもできなかった自分が初めて25セントもの「大金」を稼ぎ出した達成感に基づいている。独立独行の“person”になることが念願だったサラにとって，この成功は画期的な一大事であり，幼い彼女は無上の喜びに酔いしれている。しかしここで作者イージアスカが，サラの至福の中にゲットーの移民たちの喧燥を不可欠の要素として織り込み，又東欧からの移民女性ムーメンカの知恵と活力をその基盤として描き込んだことは，注目に値する。イージアスカはサラのこの成功の源泉を，

ユダヤ移民，特にユダヤ移民女性の資質と分かち難いものと考えていたのではないだろうか。

翻ってアメリカ移住前の東欧のユダヤ女性たちについて考えてみると，彼女たちはユダヤの父権制の下，母，妻としての役割を最重要とされてきたが，一方では貧苦に喘ぐ生活の中で一家の稼ぎ手としての役割も又期待されていた。異邦人による差別と迫害に加えて前近代的な社会形態の中で，ユダヤ男性たちは多くの場合一家を支えるに足る稼ぎを捻出することが出来なかった。中でも夫が学問や宗教の道を歩む時，たとえ無収入といえどもそれらに最高の価値を置くユダヤ文化の中で，妻が大黒柱となって働く事は当然のことと考えられた。彼女たちは食料，布地，瀬戸物などを売る小さな店を切り盛りし，或は自家製パンや服を戸口から戸口へ行商して歩いた。そして得た僅かな収入で，安価に入手できる素材に工夫を凝らし，家族の為に，更にはサバスの来客にまで，豊かな食事を供したという。このように一家の経済と生活の強靭な支え手だった彼女たちは，ユダヤ社会の様々な男尊女卑にもかかわらず，一家の中で強力な発言権，決定権を握ることが多かった[5]。アメリカに移住してきたユダヤ系女性たちも，当然のことながら，こうした東欧のユダヤ女性たちの伝統を，その身の奥深くに受け継いできたのである。

ポーランドからの移民であるサラの母の場合をみてみよう。家賃に窮した彼女は，夫の部屋に下宿人を置き，部屋代と賄い代でしのぐことを思いつく。思いつけば即実行，ムーメンカから借りたスプリングやニシンの樽などの廃品利用で代用ベッドやテーブルをつくり，狭いテナメントの一角に見違えるような貸部屋を仕立て上げる。後に父が傾きかけた食料品店を掴まされた時も，あちこちの問屋を回り必死で仕入れ品をかき集めてきたのは，結局母だった。安価な材料で身も心も満たす食事を供し，客が来れば全身で喜びを表しもてなした母。彼女のこうした資質を端的に語るのは，ポーランドでのシュテトルでの娘時代である。特に，村一番のダンスの名手だったという母の姿と“dancing sunshine” (33)と形容される彼女の手作りの七色のテーブルクロスは，貧困に歪められる前の溌剌とした彼女の姿を如実に映すものである。そこにはニシン売りに成功し束の間とはいえ貧苦を克服したサラの幸福感に通じるものが，同じくダンスの比喩を使って表現されている。イージアスカは幼いサラの原体験の中に，東欧ユダヤ女性たちが長い苦難の歴史の中で培ってきた逞しい活力と知恵，躍動する生の充溢感，家族や共同体への愛を，母やムーメンカを通じてしっかりと根づかせている。

それでは次に，父の方からサラが受け継いだものに目を転じてみよう。専制君主のようだった父に対する反逆と憤怒の炎のために，一緒に暮らしていた頃のサラにには見えなかった父のもう一つの面が見えてくるのは，初めての恋人と別れた直後のことである。

He[Sara's father] had given up worldly success to drink the wisdom of the Torah. He

would tell me that, after all, I was the only daughter of his faith. I had lived the old, old story which he had drilled into our childhood ears — the story of Jacob and Esau. I had it from Father, this ingrained something in me that would not let me take the mess of pottage. (202)

旧世界から移住してきたユダヤ人が新世界の物質主義，拝金主義に次々と染まってゆく中で，父はよろめきながらも神の道を追求し続けた数少ない人々の一人だったことに思い至ったサラは，幼い日，聖書の中の予言者のようないでたちで一心不乱に祈っていた父の姿や，固唾を飲んで耳を傾けたヤコブとエソウの物語，父の部屋から洩れ聞こえたイザヤの祈りを想起する。それは，目先の利益に惑わされることなく，長い苦難の歴史の中でも不変の信仰と孤高の精神世界を追求することの尊さを，幼いサラに平易に説き開示するものだった。物心ついて以来毎日見聞きし，心の奥深くに浸透したこうした精神は，サラの将来に決定的な影響を与えることとなる。

以上見てきたように旧世界からの遺産は，幼いサラの心中奥深くに受け継がれその根幹を形成して行く。従って，彼女が憧れる自由と平等の国アメリカで独立独行の“person”として生きるということには，サラ自身は未だ認識していないものの，東欧ユダヤ女性の活力と知恵，生の充溢感の享受，共同体への愛，ユダヤ教に裏打ちされた歴史性，精神性，霊性などが重要な要素となっている。この点を確認して，新世界に羽ばたいて行くサラを次に見て行きたい。

III

家を出たサラは，昼間は洗濯屋で働き夜は夜学に通う日々を送りながら，アメリカ化したユダヤ人，そしてアメリカ人に次々と遭遇してゆく。一人暮らしの孤独感，長年に渡るアメリカへの憧憬から，サラは彼らに抗い難くひきつけられる。彼らと友達になりたい，彼らのようになりたいといういう思いが心中に燃え上がる。しかし実際に彼らに近づいてみると，彼女の期待は裏切られ，違和感と失望感に責め苛まれる。何故だろうか。

先ず洗濯屋で働く他の娘たちとの関係をみてみよう。楽しげに談笑する彼女たちの輪の中にとけこもうと，サラは涙ぐましい努力を重ねる。仕事と勉学に明け暮れ友も楽しみも知らない我が身にひきかえ，華やかな衣装で笑いさざめく彼女たちは，生の喜びを満喫しているように見えたのである。とうとうサラはこれまで固く閉ざしていた心を開き，皆と同じようにルージュをさし，会話の輪の中に入ろうとする。しかし皆からは，家出をして一人暮らし

をするほど大胆なサラなら男を隠しているのではないかと勘ぐられ，徹底的に仲間外れにされ，一方サラの方も，自らを偽って皆と同じになることなど出来ないと悟り，一人寂しく又勉学にもどってゆく。

イージアスカはこの件について深入りしていないが，この件には当時のアメリカで支配的だった"lady"の規範と，前述した東欧ユダヤ女性の生き方の根本的な対比が伏在している[6]。当時のアメリカの中産階級家庭では，妻は家事に専念し，商売などに口出しすることははしたないこととされていた。*Jewish Women in America*は東欧から続々と押し寄せてきたユダヤ系女性たちが，当時のそうしたアメリカ人の目にいかに"aggressive"，"masculine"と映ったかを詳述している[7]。妻の専業主婦化，夫への経済的依存を伴う"lady"像は未婚の娘たちに主体的生き方を放棄させ，その関心を経済的に安定した男性との結婚へと向かわせる。洗濯屋で働く娘たちの関心が専ら異性へと向き，自活するサラに対して本能的な違和感を覚え，一方サラの方も当初惹かれた彼女たちの華やかさが，自らの求める道とは本質的に異なることを悟り離れてゆくのは，両者のこうした生き方の相違に基づくものと言えるだろう。

サラが次に魅了されるのは，姉のFaniaが独身の妹の将来を案じて送り込んだ，ユダヤ系の青年Max Goldsteinである。サラと同じく若くして家を出奔，移民船から無一文で降り立ち，雪かきや行商人の手伝いから持ち前の才覚とバイタリティーで身を起こした彼は，今やデパートや不動産を手広く商う青年実業家だった。二人は互いに，激しい情熱を抱いた似た者同士であることを一瞬の内に見て取り，磁石のように引かれ合う。しかしデートを重ねる内にサラは，彼が学問を蔑視していることに気付く。無学ながらも身を起こし，今では大卒者をも会計やセールスマンとして自由に使いこなす彼は，教育や学歴を蔑視し，サラが何よりも大切にしている学問への情熱を理解することができない。このことが主原因となってプロポーズを断るのであるが，この決断が物心つくかつかない頃から父に叩き込まれた宗教，学問への情熱，深い精神性への飢えるような思いに基づいていることは，彼との別離の直後のサラの次の内省に明らかである。

> For the whole day after, I thought of Father. If I only could talk myself out to him. Now, I would love and understand him from afar as I had once hated him and could not bear him when near. I had broken away from him as a child only to be drawn to him now, in my great spiritual need, as a person is drawn to a person.
>
> Some of his preachings came back to me : "Can fire and water live together ? Neither can Godliness and an easy life." (202)

トーラの女性蔑視の思想に対して激しく反発しユダヤ教に背を向けたはずのサラだったが，その心の奥底には父を通してユダヤ教の根幹を成す霊性，精神性が脈々と受け継がれており，無意識の内にそれらによってアメリカの物質主義に染まったマックスを批判せずにはおれないのである。

念願の大学生活送るため西部に到着したサラは，静かでゆったりとした人々や町の佇まいに目をみはる。日々の糧を得るために押し合いへし合いし，アメリカを手にするために血眼になっていたニューヨークの移民たちとは，何という違いだろう。彼らには只単に生活苦から解放された人々のゆとりというだけではなく，何世代にも渡り生まれながらにしてアメリカを享受してきた人々の落ち着きと平安があった。サラは当初彼らの若々しさ，染み一つない清潔さを“the spick-and-span cleanliness of those people” (212), “By all their difference from me, their youth, their shiny freshness, their carefreeness, they pulled me out of my senses to them” (213), “What a fresh, clean beauty !” (213)と絶賛する。しかし変化はある日の心理学の課題を契機として出現する。怒りなどの激しい感情がいかに冷静な思考を妨げるがを具体例を挙げて検証せよという課題を前に，サラの心中に眠っていたゲットーでの強烈な体験が蘇る。移民たちの熱気にごった返していたヘスター通り，食べるものにも事欠き無我夢中でニシンを売った時のこと，父との大喧嘩と家出。これまで人生の汚点としか思えなかったこうした経験によって，周囲の何不自由なく育った学生たちが想像もつかないような生の真実を幼くして学び，大人へと成熟したことを，サラは初めて認識する。その時語るべき何の経験も持たない学生たちは，“many pink-faced children who never had had to live yet” (223)へと急変する。こうしてサラは，ゲットーでの経験と照合しつつ，アメリカ人学生たちの幼さを批判するようになるのである。

このアメリカの未熟さ，新しさは，サラの胸中で長い歴史をもつユダヤの民とも対比される。事ある毎に笑い者にされ，華やかなパーティーの輪の中にも入れず，遂に会場から逃げ出したサラは力尽きて倒れ，天空に向かって祈り始める。無限の時の流れを超えて輝き続けてきた星を見つめる内に，サラは古えより獄につながれ，或は病に伏し，苦悩の内に力尽きて同じように星々を見上げた無数の人々に思いを馳せる。彼らに比べれば自らの苦しみなど取るに足りない程小さなもの，サラは心の傷が癒されていくのを感じる。ユダヤ教を嫌って家を飛び出したサラだったが，苦悩の時に想起されるのは，“the captives in prison, the sick and the suffering from the beginning of time” (220)という記述から推察できるように，捕囚と苦難の連続だったユダヤの民の歴史だった。それは，その民を見守り続けた宇宙の始源の時からの神の存在と相俟って，アメリカの新しさを未熟さとして強調する。

こうしてサラはアメリカ化したユダヤ人とアメリカ人に，一時は激しく惹きつけられるので

あるが，母から継承したユダヤ女性特有の逞しい生命力や活力，父から継承したユダヤ教の霊性，精神性，民族の歴史性などと彼らを無意識の内に比較し，結局は彼らを次々と批判し決別してゆく。

IV

大学生活も半ばをすぎると，それまでは抑圧的なもの，狭隘なものとして排除してきたユダヤ性を，新しい角度から捉え直そうとする動きがサラの心中に芽生え，ユダヤ性の自覚と回帰という現象が現出し始める。

サラは時折学長の家を訪問するようになっていたが，ある日のこと，何故上流階級に生まれついた彼がサラのような貧しい移民を無理なく理解できるのかと問うと，彼は，開拓民として銃を携えて荒野に乗り込み，掘建て小屋から出発したという彼の祖母のことを語り始める。そして自分には彼女ほどの力がないのではないかと恥じつつも，サラたち移民世代こそアメリカを逞しく生き抜く力をもっていると勇気づける。サラは目から鱗が落ちる思いで，軽蔑の対象と化していた未熟で物質主義に染まったアメリカの中に，血と汗と涙にまみれたアメリカ開拓移民の歴史を発見する。主人公がアメリカへの憧憬から反発を経て辿り着くこうしたアメリカの再評価は，"America and I"，*Red Ribbon on a White Horse*などにも呈示され，イージアスカが生涯に渡って夢見続けた理想の一つの典型と考えられるが，それは又視点を転ずれば，若く豊かなアメリカの中にユダヤ民族の苦難に満ちた歴史性を融合しようとする試みとも考えられるだろう。

大学を卒業し念願の教師の職を得てニューヨークのゲットーへ帰還したサラは，数年振りに家を訪れ，母が余命幾ばくも無いことを知る。それでも母はオールドミス呼ばわりする姉や，親不孝者と非難する父からサラを必死で守り，サラが教師となれたことを人一倍喜ぶ。未婚の女が人間以下の者として軽蔑され，学問が女に禁じられていた抑圧的な伝統の下で育った母は，自らは自立への願いを枯渇させてしまったのであるが，忘却の彼方へと押しやられていたその願いが娘に受け継がれ遂に結実したことを，死の床で知る。サラもまた記憶の中の母の姿を次々に辿ってゆく。それは，東欧の結婚式で夢中になって踊る母，家族のために身を削って働く母，なけなしのもので客を精一杯もてなす母の姿だった。サラがこの直後に経験した超越的経験，母の魂が文字通りサラの肉体の中に入り込んでくるという不思議な感覚は，こうした旧世界の母の活力，知恵，愛が，新世界の娘に継承されたこと，そして娘が遂にそのことを自覚したことを如実に表すものである。

旧世界への回帰の導き手として決定的な役割を果たすのは，Hugo Seeligである。彼は新世

界で着実に自らの地歩を築き上げ，若くしてサラの勤務先の小学校の校長となっていた。生活のための日々の闘争から解放されゆったりと寛ぐ彼は，現在を，そして未来をより良いものにしたいという夢を育みつつも，旧世界ユダヤの遺産を大切に胸に暖めている。

> His face. The features — all fineness and strength. The keen, kind gray eyes. A Jewish face, and yet none of the greedy eagerness of Hester Street any more. It was the face of a dreamer, set free in the new air of America. Not like Father with his eyes on the past, but a dreamer who had found his work among us of the East Side. (273)

幼少時に移住しながらも，旧世界で家畜と一つ屋根の下に暮らしたシュテトルでの生活，出発の日に見送りに来てくれた村人たちの思い出を生き生きと語る彼は，サラとの結婚に際しても，父との同居を推進するばかりか，父にヘブライ語の教授まで願い出る。父が身に帯びているユダヤの過去の遺産こそが，現在，そして未来を豊かにすると確信しているからである。こうしてサラはヒューゴに導かれ，父の元へ，そして父の体現するユダヤの精神性，霊性への回帰を遂げる。

しかしこの作品の終局には影のように陰鬱な不安と疑問が付き纏う。イージアスカはサラにヒューゴの考えを“an easy enthusiasm” (296)と呼ばせ，サラの暗い予感の内にこの物語を終わらせる。

> Then Hugo's grip tightened on my arm and we walked on. I felt the shadow still there, over me. It wasn't just my Father, but the generations who made my father whose weight was still upon me. (297)

サラの不安は，彼女とヒューゴの新生活が，かつての姉と恋人たちのように，父をはじめとしてユダヤの歴史を連綿と流れ続ける徹底的な男尊女卑の精神によって打ち砕かれてしまうのではないか，という思いに端を発している。彼女は何世代にも渡るユダヤの伝統の重みの前で自己とヒューゴの非力を予感して慄く。しかし頼みの綱として握り締めている彼の固い“grip”こそ，彼女が当面最大の警戒をしなければならない相手ではないだろうか。というのも，理想を共有する若い二人の関係の背後からは，サラが忌避した旧態依然とした主体と従属物としての男女の関係が垣間見えるからである。このことは，サラとヒューゴの関係の始まりにすでに明示される。サラが初めて彼と親しく言葉を交えるのは，子供たちの発音を教室で矯正するサラを見かけた彼が，思わず彼女の発音を矯正する時である。この時のサラの彼へ

の視線は，素晴らしいトーラの物語を披露する父に向けられた母の恍惚とした視線と酷似している。それらは，女たちが憧れつつも手中にすることの出来なかったものを掌握する男たちを力強い主体として崇め，彼らから承認されることによりはじめて自己の存在を確認する従属物の視線と言えるだろう。幼い時サラは，母と姉たちの人生を踏み潰した父に反逆して遮二無二家を飛び出した。無力だった彼女にはそれ以外に身を守る術は無かったのである。念願の教師となり経済的に自立し精神的にも成熟したサラが，母や姉たちのような形で彼の意のままになることは最早有り得ない。しかし学問と精神性霊性の象徴として理想化された主体としての男と，彼を崇め続ける従属物としての女というサラの心中に内面化された男女の関係が，ヒューゴと彼女のこれからの関係に決定的な影響を与えることは想像に難くない。実際，*Bread Givers*において未解決のままに残されたこの問題は，*All I Could Never Be, Salome of the Tenements, Red Ribbon on a White Horse*などの中のヒロインと恋人の関係において深化されてゆくこととなる。

*Bread Givers*は，こうした問題を孕みつつも，一人のユダヤ系少女の成長を移民一世世代特有の力強い筆致で綴り，ユダヤ系女性がアメリカで直面する様々な問題を逸早く素描した作品と位置づけることができるだろう。男尊女卑ゆえのユダヤ性との全面的決別，経済的精神的自立，母を通じての東欧ユダヤ女性の遺産の継承とその自覚，父から継承したユダヤの霊性，精神性への回帰というパターンは，現代ユダヤ系女性作家がユダヤ社会に背を向ける形で６０年代フェミニズムへと向かい，やがて80年代にユダヤ性へと回帰していった道程に，基本的には通じるものである。イージアスカは，Anne Roiphe，Rebecca Goldstein，Kim Chernin，Nessa Rapoportらが互いに影響を与え合いながら現在様々な形で追求しているこの主題に20年代に早くも取り組み，その原型をサラの成長の中に示したと言えるだろう。

注

1 Anzia Yezierska, *Bread Givers : A Struggle between a Father of the Old World and a Daughter of the New.* New York: Persea Books, 1975. 65. 以下同書からの引用は全てこの版により，文中に頁数を示す。

2 Louise Levitas Henriksen, *Anzia Yezierska : A Writer's Life.* New Brunswick : Rutgers University Press, 1988. 216.

3 例えば*Lovingkindness*における祖父とヒロインの次の会話を参照。

"In Bartslav I personally knew the Bartslav Hasidim who told the stories told to their fathers by the famous Rabbi Nachman.... Those were stories that made the stars come into your mouth so you could taste them."

"Tell me a story," I had said.

"No.... Not for you."

Anne Roiphe, *Lovingkindness.* New York : Warner Books, 1987. 11.

4 例えばHerzogによる母の描写を参照。 Saul Bellow, *Herzog.* Harmondsworth : Penguin, 1978. 145.

5 Charlotte Baum, et al. *The Jewish Woman in America.* New York : Plume Book, 1976. 56.

6 *Ibid.* 190-3
7 *Ibid.* 56.